三口浄水場排水処理施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

坂　手　隈　城　跡

中津市文化財調査報告　第52集

2011

中津市教育委員会

西区ST-1

序　　文

大分県の最北部に位置する中津市は、国指定名勝耶馬溪など緑豊かな自然や城下町の薫りを色濃く残す、自然と文化の町として知られています。近年は、自動車関連会社などの進出を受け、工業の町としての新たな側面を見せはじめています。中津日田道路や東九州自動車道が開通すれば、さらなる発展が期待されます。

一方、経済活動の発展・促進は、埋蔵文化財へ影響を与えていることも事実です。世界的な景気悪化を受け各種開発の動向は不透明でありますが、今後も埋蔵文化財を取り巻く状況の厳しさは変わらないことが予想されます。文化財は現代に生きる我々が責任をもって未来へ伝えていかなくてはなりません。

本書はこうした開発の中で、中津市大字相原における三口浄水場排水処理施設建設工事に先立ち、中津市教育委員会が調査した坂手隈城跡の発掘調査報告書です。調査によって奈良時代の副葬品を伴う骨蔵器が発見され、古代の葬送を考える上で貴重な資料となりました。

本書が学術研究資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護やその理解への一助となりましたら幸いです。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまでご協力賜りました関係各位、及び、調査に従事して下さった方々に対し、心から感謝申し上げます。

平成23年3月31日

中津市教育委員会
教育長　北　山　一　彦

例　　言

1．　本書は大分県中津市大字相原に所在する三口浄水場排水処理施設建設に伴う坂手隈城跡の発掘調査事業の報告書である。

2．　確認調査は平成17年（2005）9月15日～9月30日まで行い、本調査は平成18年（2006）4月10日～平成18年8月4日まで実施した。報告書作成作業は平成22年度に行った。

3．　確認調査は花崎徹（中津市教育委員会）が、本調査は浦井直幸が担当した。

4．　遺構の実測・撮影は浦井が行った。ST-1出土土器の実測は村上久和氏（大分県教育庁埋蔵文化財センター）の協力を得、その他の遺物の実測・撮影・浄書は、雅企画㈲に委託し、一部浦井が行った。遺構実測図の浄書や整理作業は中津市歴史民俗資料館の金丸孝子、浅田くるみの協力を得た。

5．　現場で用いた座標は日本測地系による。

6．　出土人骨の分析・報告は九州大学大学院比較社会文化研究院学府長 田中良之先生に依頼し、玉稿を得た。現在、人骨は同研究院へ寄託している。

7．　鉄製品の保存処理・X線透過は大分県立歴史博物館に依頼した。

8．　遺構の表記は下記のとおりである。
ST（火葬墓）　SK（土坑）　SD（溝状遺構）　P（柱穴状遺構）

9．　図面等記録類、出土遺物は中津市歴史民俗資料館に保管している。

10.　本書で使用した出土遺物の分類については、以下の文献による。

須恵器・土師器

佐藤浩司「奈良時代の須恵器と土師器-旧豊前国を中心として-」『東アジアの考古と歴史　下』1987

瓦質土器

小柳和宏「宇佐高村と中世雑器生産」『大分県地方史第159号』　1995

瓦

中津市教育委員会「相原廃寺Ⅱ」中津市文化財調査報告　第8集　1990

〃　　「ホヤ池窯跡」中津市文化財調査報告　第15集　1995

11.　調査期間中及び報告書作成にあたっては下記の方にご指導・ご協力いただいた。記して感謝申し上げます。

村上　久和（大分県教育庁埋蔵文化財センター）（敬称略）

12.　本書の執筆・編集は浦井が行った。

目　　次

巻頭図版
序文
例言

第１章　調査の経過 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査体制 …… 1

第２章　遺跡の位置と環境 …… 2
　第１節　地理的環境 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 3

第３章　調査の方法と成果 …… 5
　第１節　調査の方法 …… 5
　第２節　西区の調査 …… 6
　第３節　東区の調査 …… 13

第４章　坂手隈城跡　火葬墓出土人骨について …… 19

第５章　総　括 …… 23

写真図版 …… 27
報告書名抄録 …… 35

挿　図　目　次

第１図　周辺地形図 …… 2
第２図　中津市内主要遺跡分布図 … 4
第３図　調査区と周辺遺跡分布図 … 5
第４図　西区・東区平面図 …… 5
第５図　西区基本層序 …… 6
第６図　西区遺構配置図 …… 7
第７図　ST-１平面図・土層断面図・見通し図 …… 8
第８図　ST-１出土遺物 …… 8
第９図　ST-２平面図・土層断面図 … 9
第10図　ST-２出土遺物 …… 9
第11図　SK-１平面図・断面図 …… 9
第12図　SK-１出土遺物 …… 10
第13図　SK-２平面図・断面図 …… 10
第14図　SK-２出土遺物 …… 10
第15図　SD-１～６平面図・断面図 …… 11
第16図　SD-２出土遺物 …… 11
第17図　柱穴状遺構・調査区出土遺物 …… 12
第18図　東区基本層序図 …… 13
第19図　東区遺構配置図 …… 13
第20図　SD-１平面図・断面図 …… 14
第21図　SD-１出土遺物 …… 14
第22図　SD-２・３平面図・断面図 …… 15
第23図　SD-３出土遺物 …… 15
第24図　SD-４平面図・断面図・出土遺物 …… 16
第25図　SD-５・６平面図・断面図・出土遺物 … 17
第26図　伊藤田大谷窯跡周辺出土骨蔵器 …… 23
第27図　中津市内出土骨蔵器分布図 …… 24

表　目　次

第1表　遺物観察表１　土器・瓦 …… 18
第2表　遺物観察表2　鉄製品 …… 18
第3表　遺物観察表3　石製品 …… 18

写真図版目次

巻頭図版　西区ST－1
写真図版１　遺跡遠景　西区全景 …… 27
写真図版２　ST-１検出状況　ST-１遺物検出状況　ST-１完掘状況 …… 28
写真図版３　ST-２検出状況　ST-２遺物検出状況　ST-２土層堆積状況 …… 29
SK-１遺物検出状況　SK-２完掘状況
写真図版４　東区全景　SD-２　SD-５・６ …… 30
写真図版５　出土遺物 …… 31
写真図版６　出土遺物 …… 32
写真図版７　出土遺物 …… 33

第１章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

今回調査した坂手隈城跡は中津市大字相原に所在する。遺跡は中津駅から南に直線距離で約４km離れた地点にある。相原地区は南北に長い鍵状の区域で、その範囲は洪積台地と沖積平野に及ぶ。古くから稲作や畑作を生業とした第一次産業中心の地域であるが、農地は宅地化の傾向が著しく、往時の景観は失われつつある。

三口浄水場排水処理施設完成後（東から）

調査対象地は洪積台地と山国川の接点、標高31mの地点で中津市三口浄水場の北側にあたる。三口浄水場は山国川の表流水を取水・浄水し、市内の80%区域に給水する施設である。近年、浄水作業により生じた排水汚泥を処理する施設の建設が求められ、平成18年度に工事着工が計画された。しかしながら、現地は坂手隈城跡として周知される地点で、かつ周辺には上ノ原横穴墓などが所在する遺跡密度の極めて高い地域として知られていた。計画では建設予定地に2m以上の盛土を行い、施設を建設するものであったため、市教育委員会は市水道局と協議を行い、事前に確認調査を実施することで合意した。

平成17年9月、予定地に計22本のトレンチを設定したところ、予定地の東部と西部で遺構・遺物が発見された。遺物は古代の須恵器・土師器が大半で、予定地内に該期の遺構の存在が想定された。この調査結果を受け、教育委員会は水道局と協議を行い、遺構を発見した２地点を平成18年度に本調査することが決まった。水道局から平成18年３月29日付けで文化財保護法94条の通知がなされ、教育委員会は発掘調査が必要と所見し、大分県教育委員会へ進達した。

第２節　調査体制

平成18年度の体制は下記のとおり。（本発掘調査）

調査主体　　中津市教育委員会
調査責任者　影木荘一郎（中津市教育委員会教育長）
調査事務　　國分　重喜（　　同　　文化振興課長）
　　保科　　眞（　　同　　文化財係長）
調査担当　　浦井　直幸（　　同　　文化財係員）

平成22年度の体制は下記のとおり。（整理・報告書刊行）

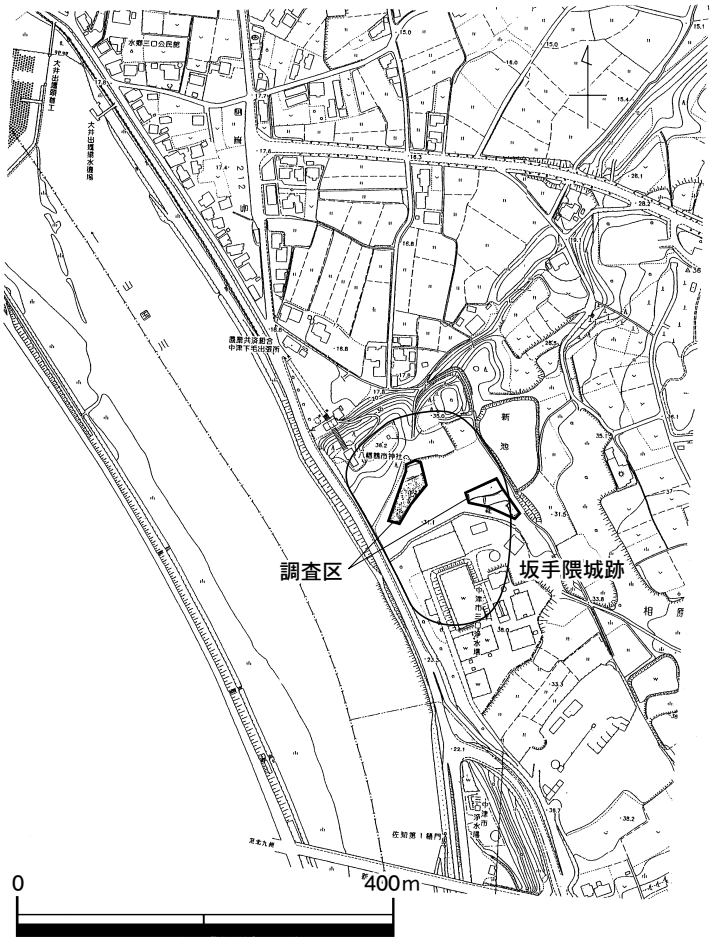
調査主体　　中津市教育委員会
調査責任者　北山　一彦（中津市教育委員会教育長）
調査事務　　尾家　勝彦（　　同　　文化振興課長）
　　田中布由彦（　　同　　文化財係長）
担　　当　　浦井　直幸（　　同　　文化財係員）

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

中津市は大分県の最北部に位置する。平成17年３月に下毛郡３町１村（本耶馬渓町・耶馬溪町・山国町・三光村）と市町村合併を行い市域は約８倍に拡大した。人口約８万６千人、面積491km²を誇り、北は周防灘に面し、西は福岡県、東は宇佐市、南は玖珠町・日田市と境を接する。市内には英彦山に源を発する一級河川山国川が南から北へ貫流し流域一帯を潤す。上中流域は山々に囲まれた地形で、山国川やその支流により開析された河岸段丘上に集落は営まれる。頼山陽により絶景と称された奇岩・奇勝の多くは名勝耶馬溪として国の指定を受ける。下流域は沖積作用による県北最大の平野「沖代平野」と洪積台地「下毛原台地」が広がる。

坂手隈城跡は下毛原台地の西端、標高36mの高台に所在し、現在は八幡鶴市神社が鎮座する。この地点は西に山国川を見下ろし、北は沖代平野を望む交通の要衝に立地している。神社建設の際に一部破壊されているが、竪堀・曲輪などが良好に遺存する。遺跡の範囲は、この高台から今回の調査対象地や三口浄水場を取り込むように楕円形を呈する。調査対象地の標高は31mで、北側に八幡鶴市神社が所在し、その比高差は5mを測る。調査地は周辺の土地と比してやや低く、調査以前は荒蕪地であった。



第１図　周辺地形図（S=1/8,000）

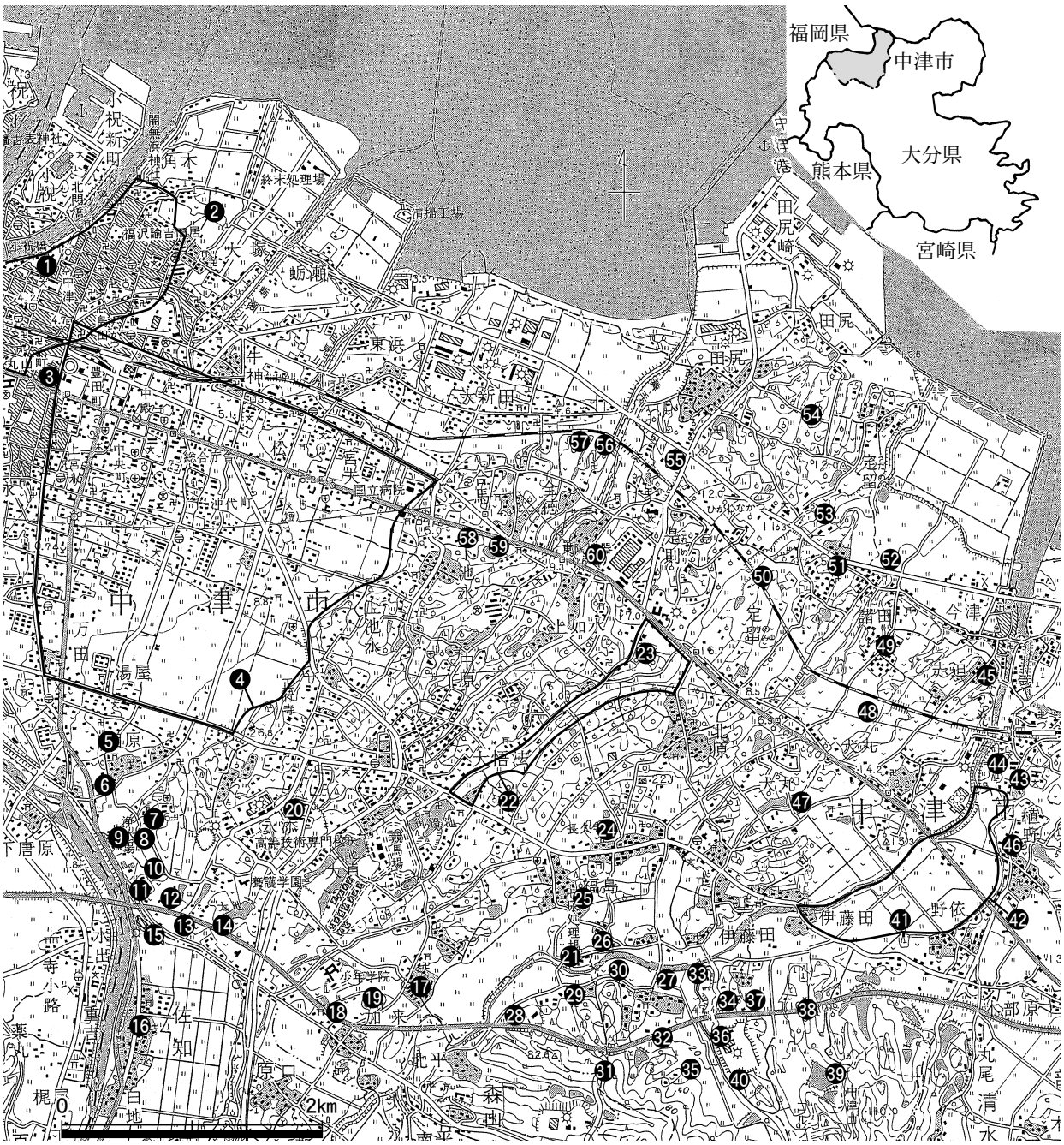
第２節　歴史的環境

市内の遺跡を概観すると旧石器時代の石器は才木遺跡（35）や大坪遺跡で発見されている。縄文時代は上畑成遺跡（47）で早期の無文土器や土坑が検出された。早期末から前期は黒水遺跡（18）で陥し穴が発見されている。遺跡数は縄文後期から増大する。植野貝塚（46）やボウガキ遺跡（21)、ボウガキ遺跡に伴う入垣貝塚、女体像と見られる土偶が出土した高畑遺跡が挙げられる。縄文時代の各遺跡は台地上や自然堤防上に認められるため、低地は住環境に適していなかったものと想像できる。弥生時代では前期後葉から中期初頭の上ノ原平原遺跡（13）で貯蔵穴群が確認される。続く中期では二列埋葬の土壙墓・住居跡・溝が福島遺跡（25）で確認され、前期末から後期初頭の集落全域が森山遺跡（28）で検出された。弥生時代の遺跡もその多くが台地上など高所において発見される。古墳時代の遺跡としては亀山（亀塚）古墳（58）が挙げられるが、明治時代に調査せず破壊されたため詳細は不明である。その他の墳墓の多くは下毛原台地の西南に造営される。５世紀中ごろには山国川に面する勘助野地遺跡（12）で方形周溝墓が造営され、５世紀後半から７世紀前半にかけては上ノ原横穴墓（11）が展開する。古墳時代後期には三保地域に岩井崎横穴墓群（29)、城山古墳群（34)、城山横穴墓群（33）などが見られる。また、７世紀から９世紀にかけて相原山首遺跡（7）で方墳が造られる。古墳時代後期の集落は近年、諸田遺跡（49）や定留遺跡（51）でまとまって発見されている。

古代には寺院遺跡として、７世紀末に白鳳系の相原廃寺（5）が建立される。また、遅くとも８世紀初頭には沖代平野に条里制（4）が施行されたと考えられ、条里の南限は「勅使街道」と呼ばれる古代官道が走る。８世紀後半にはその官道に沿う地に下毛郡衙正倉に推定される長者屋敷官衙遺跡（20）が確認された。また、諸田南遺跡（48）では主軸方位を同じくする掘立柱建物群や円面硯が検出されている。須恵器や瓦を製作した生産遺跡には、踊ヶ迫窯跡（38)、草場窯跡（37)、洞ノ上窯跡などがある。集落遺跡としては古墳時代から10世紀まで続き緑釉陶器や墨書土器が出土した三口遺跡（6）がある。

中世には、長久寺の田丸城跡（24）をはじめ、坂手隈城跡（9）など中世城館が市内各地に築かれる。16世紀末は黒田氏の入封によって中津城（1）が築城される。近年の調査によって、中津城は石垣に高度な構築技法が採用された現存する九州最古の近世城郭であることが判明した。

近世には関ヶ原の合戦後、黒田氏に替わって細川氏が入部する。城・城下町は細川氏によって整備・拡張され、小笠原氏が入部する1632（寛永９）年に城下の造営は完成を見る（中津城下町遺跡、 2)。1717（享保２）年には奥平氏が入部し、1871（明治４）年の廃藩置県まで城下は奥平氏が統治した。



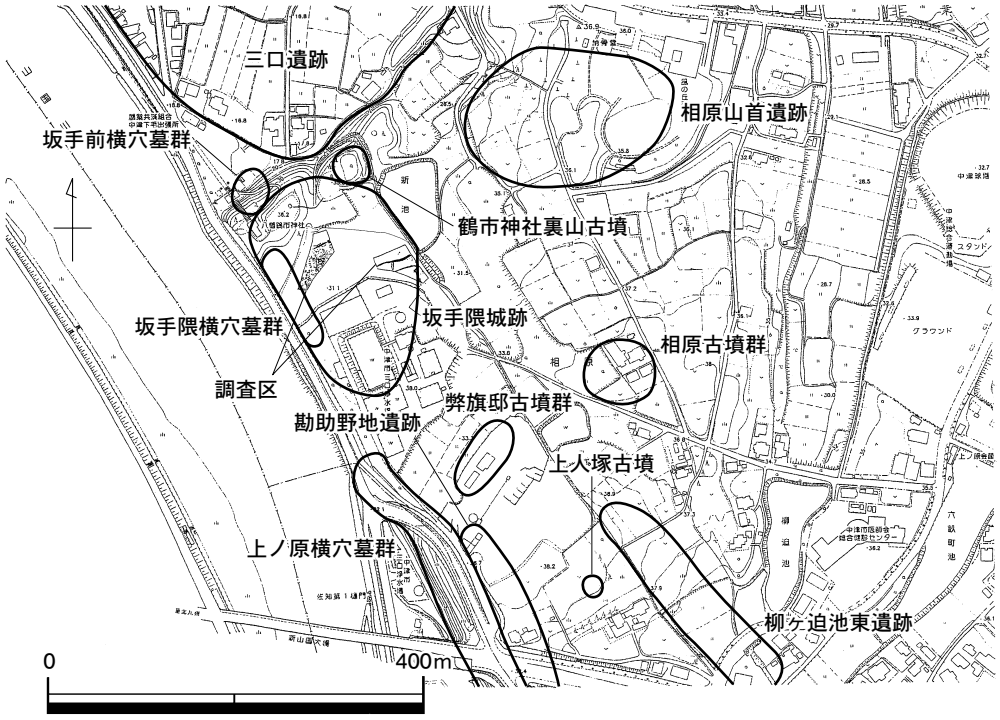
1. 中津城
2. 中津城下町遺跡
3. 豊田小学校校庭遺跡
4. 沖代地区条里跡
5. 相原廃寺
6. 三口遺跡
7. 相原山首遺跡
8. 鶴市神社裏山古墳
9. 坂手隈城跡
10. 弊旗邸古墳群
11. 上ノ原横穴墓群
12. 勘助野地遺跡
13. 上ノ原平原遺跡
14. 大池南遺跡
15. 佐知久保畑遺跡
16. 佐知遺跡
17. 加来居屋敷遺跡
18. 黒水遺跡
19. 大畑城跡
20. 長者屋敷官衙遺跡
21. ボウガキ遺跡
22. 大悟法地区条里跡
23. 原遺跡
24. 田丸城跡
25. 福島遺跡
26. 福島地下式横穴
27. 前田遺跡
28. 森山遺跡
29. 岩井崎横穴墓群
30. 犬丸川流域遺跡
31. 洞ノ上窯跡
32. 安平遺跡
33. 城山横穴墓群
34. 城山古墳群
35. 才木遺跡
36. 城山窯跡群
37. 草場窯跡
38. 踊ヶ迫窯跡
39. ホヤ池窯跡
40. 大谷窯跡
41. 野依遺跡
42. 野依地区条里跡
43. 中須遺跡
44. 若旗遺跡
45. 十前垣遺跡
46. 植野貝塚
47. 上畑成遺跡
48. 諸田南遺跡
49. 諸田遺跡
50. 定留貝塚
51. 定留遺跡
52. 天貝川遺跡
53. 和間貝塚
54. 田尻大迫遺跡
55. 是則遺跡
56. 全徳遺跡
57. ガラヌノ遺跡
58. 亀山古墳
59. 石堂池遺跡
60. 舞手川流域遺跡

第２図　中津市内主要遺跡分布図（S=1/50,000）

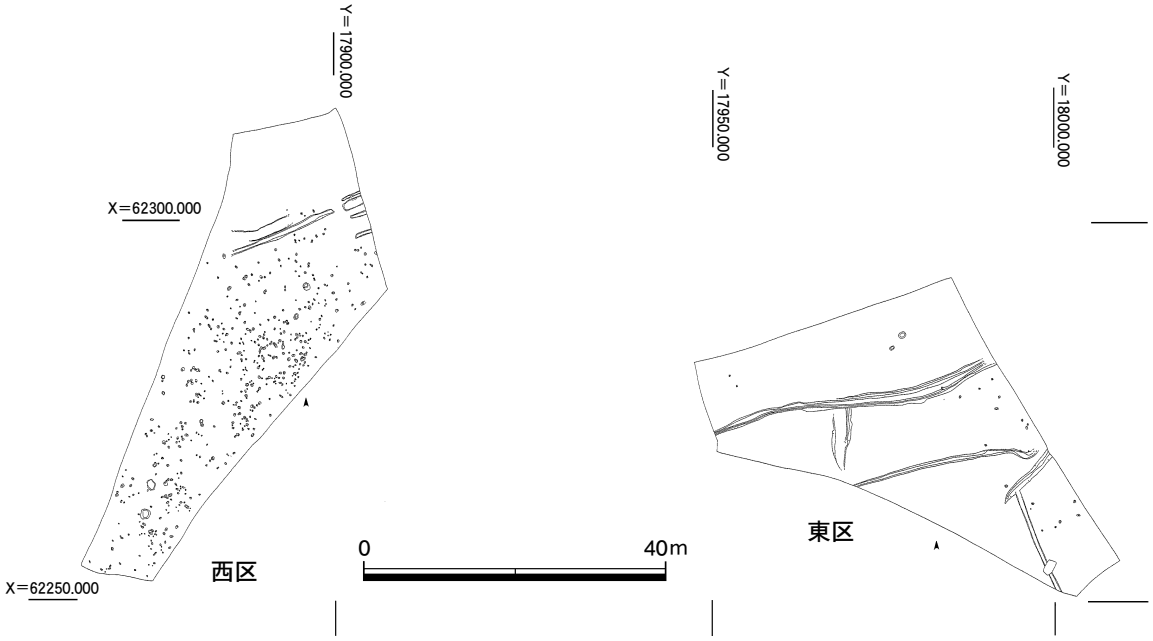
第３章 調査の方法と成果

第１節　調査の方法（第３・４図）

調査区周辺は、古墳時代・古代の遺跡が濃密に分布し特に横穴墓の密集地として知られる。このため、古代以前や中世城館関係遺構の出現も念頭におき調査にあたった。確認調査において遺構が発見された西部を「西区」、東部を「東区」として調査を進行した。作業は西区から取りかかり、表土は重機を用いて除去し、遺構検出後にグリッド設定を行った。グリッド杭は任意のものとし後日その杭に座標値を与えた。遺構の掘り下げは基本的に半截方法を採用した。



第３図　調査区と周辺遺跡分布図（S=1/8,000）

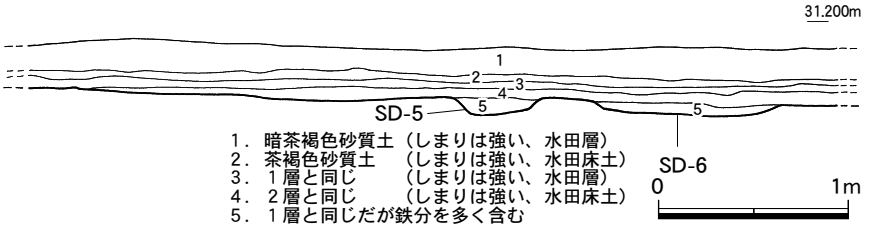


第４図　西区・東区平面図（S=1/1,000）

第２節　西区の調査

１）層序（第５図）

第５図は調査区北壁の土層である。土層観察では水田層を２面確認したため荒蕪地になる以前、西区周辺は近現代に水田が営まれていたことがわかる。検出した各遺構は地表面から30㎝下の茶褐色砂質土に掘り込まれる。地山はほぼ平坦だが、調査区南側に向けて緩やかに下り、調査区北側と南側の比高差は約50㎝となる。南側からは湧水が激しく、一旦水抜きをしても翌朝には調査区の３分の２が水没するという状況であった。これは後述する東区が、西区とは逆に東側が高く西側が低いという地形と符号しており、西区と東区の間は谷状の地形で、そこを水が通っているものと考えられた。流水方向は東から西であり、夏の炎天下にもかかわらず山国川を望む崖面には常時水が染み出していた。



第５図　西区基本層序（S=1/40）

２）遺構と遺物（第６図）

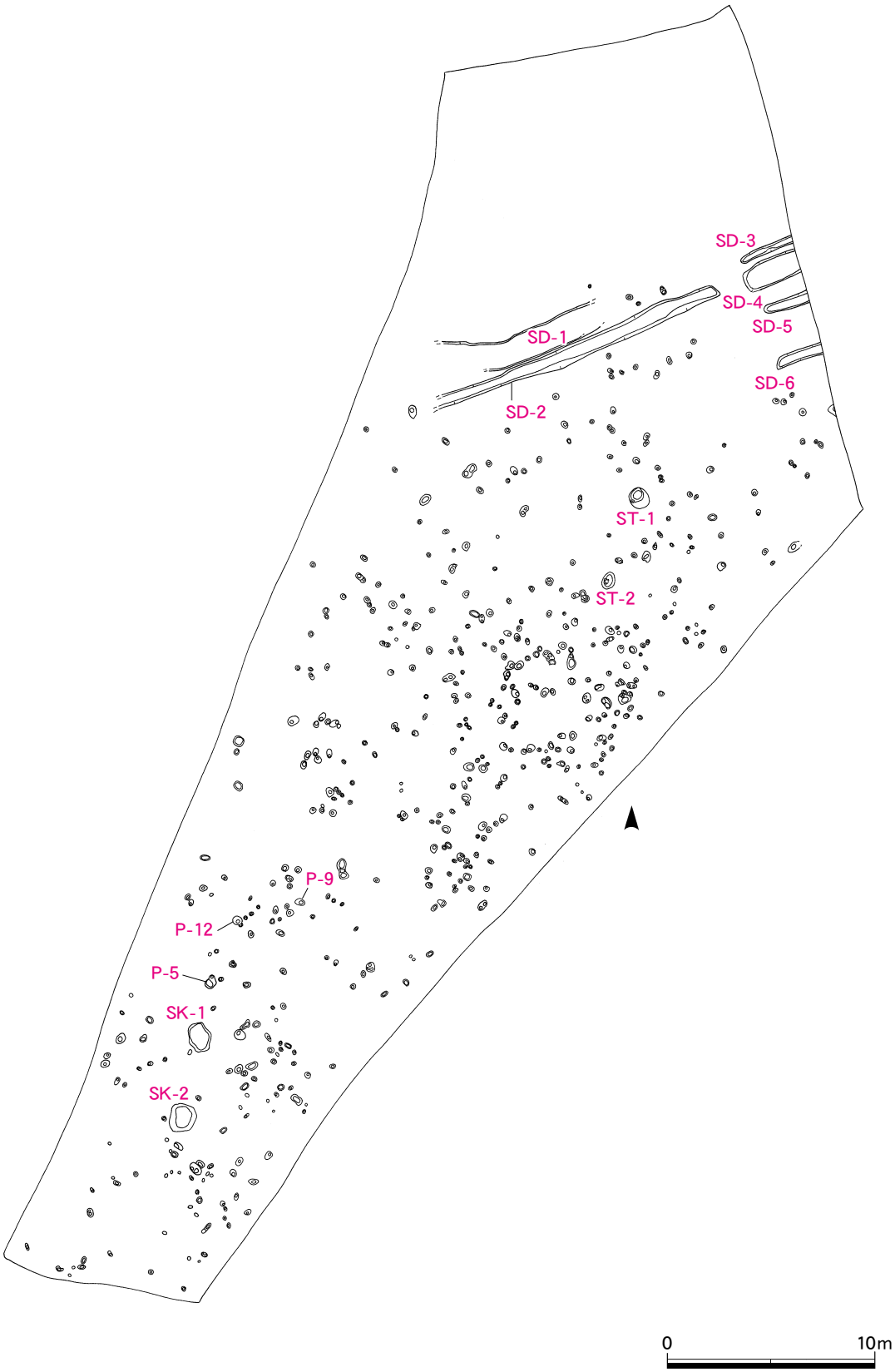
遺構は調査区のほぼ全面から検出した。検出した遺構は、火葬墓２基、土坑２基、溝状遺構６条、柱穴状遺構などである。柱穴状遺構は数多く検出したものの掘立柱建物の復元には至っていない。遺構の時期は古代と中世である。古墳時代や中世城館に伴う遺構は確認していない。調査面積は約1,000㎡で、遺物の数量はパンケース２箱分であった。

火葬墓

ST-１（第７・８図）

調査区中央やや北よりに位置する。重機による表土剥ぎの途中で須恵器の蓋を検出し、その下に短頸壺を確認した。壺の内部は骨片がつまっており、一見して火葬骨を収納した骨蔵器であることがわかった。また、壺の検出状況から墳丘を伴う可能性が高く、慎重に掘り下げを行った。その結果、墳丘とその下に土壙を検出した。墳丘は最大長104㎝、最大幅90㎝、厚層８㎝を測る。墳丘下の土壙は、最大長81㎝、最大幅60㎝、深さ24㎝を測る。西側壁面の立ち上がりは段を有し、東側は緩やかである。底面は平らに整形する。壁面及び床面は酸化焔焼成していない。なお、底面から下部に一段下がる落ち込みを確認したが遺物は出土せず形状から遺構ではない。

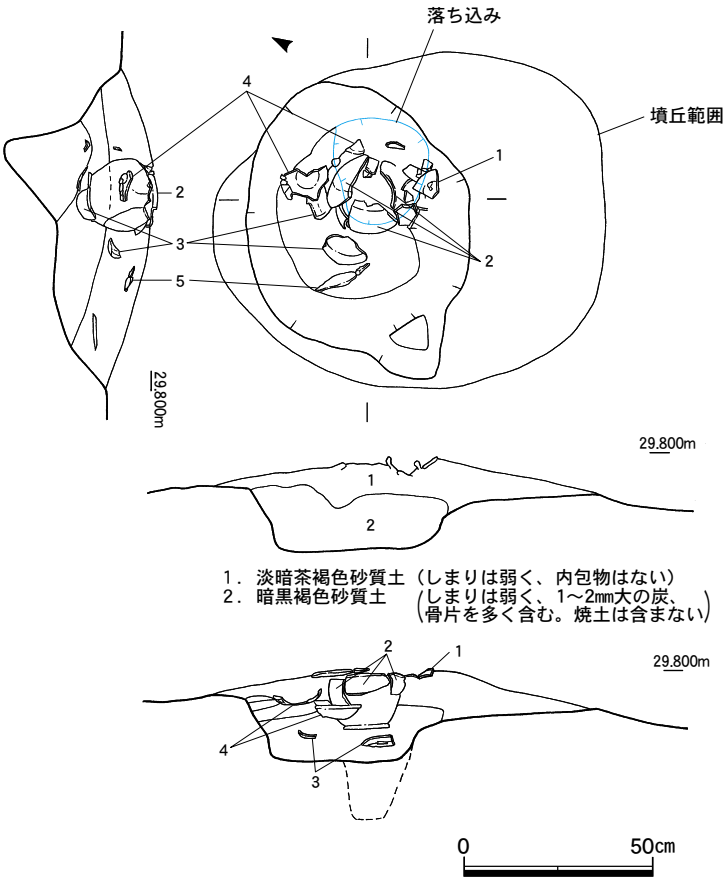
埋土は２層に分層できた。床面から上15㎝の範囲は暗黒褐色砂質土で充填する。この層には１～２㎜大の炭や骨片、第８図３・４の土師器碗が含まれ、焼土は含んでいなかった。土師器は完形ではなかったが、同層内の出土資料で70％程度復元できた。口縁部を有する資料はいずれも正位の状態で出土した。特筆されるのは３の接合状態で、黒斑のある資料とない資料が接合する。黒斑は土器焼成時のものではなく割れた後に被熱したことが観察できた。これらの状況から、ある地点において本遺構被葬者に対する火葬・収骨行為が行われ、その際に生じた炭や骨片を含む土を搬入・充



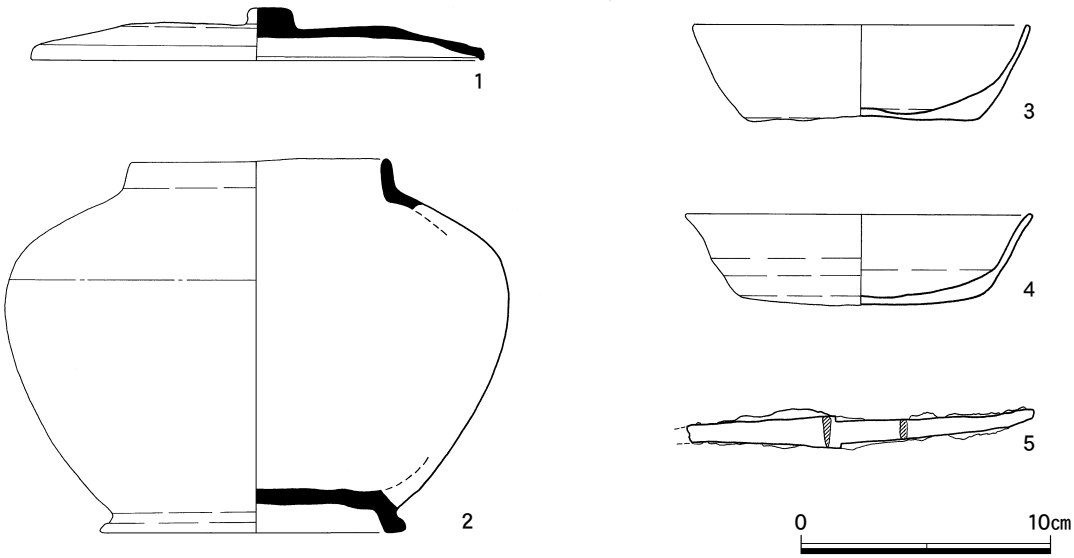
第６図　西区遺構配置図（S=1/300）

填したものと推測することができる。充填する際、その内部に破砕された土師器碗を埋置したのであろう。骨蔵器は固定するようにその体部下半をこの層に収める。設置した後は、しまりの弱い淡暗茶褐色砂質土（１層）で封をし、墳丘とする。この層には第８図５の刀子が配置されていた。

遺物は１～５が出土した。１は須恵器の蓋で、２の蓋として使用されている。口径17.8㎝、器高2.1㎝を測る。口縁端部はくちばし状を呈する。全体に明灰色であるが、擬宝珠つまみは灰色であり異なる土を用いる。８世紀中頃の遺物である。２は短頸の骨蔵器である。頸部の立ち上がりはやや内傾する。なで肩で胴部中位に最大径をもつ。高台内に長さ1.7㎝の粘土片が銹着している。時期は８世紀中頃～後半か。３・４は土師器の碗で、３は口径13.2㎝、器高3.6㎝を測る。底部は回転ヘラ切り後、丁寧なナデを施す。４は口径13.2㎝、器高3.6㎝を測る。底部は回転ヘラ切り後雑なナデで仕上げる。８世紀後半。５は刀子で刃部先端は欠損する。刃部と茎部の境に段がつく。副葬品の示す年代から、遺構の時期は８世紀中頃～後半と考えたい。



第７図　ST-1 平面図・土層断面図・見通し図（S=1/20）

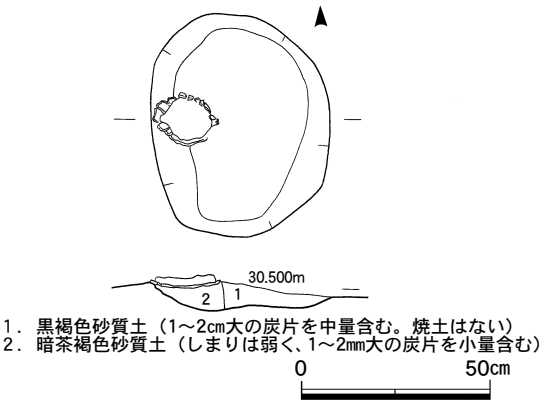


第８図　ST-1 出土遺物（S=1/3）

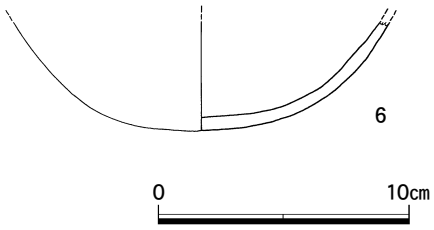
ST- 2 （第９・10図）

調査区中央やや北よりに位置する。ST- 1から南に約4.8m離れる。重機による表土剥ぎの途中で骨片の集中部を確認したため精査したところ、骨蔵器を伴う火葬墓であることが判明した。遺構の残存状況は悪く、その大半は後世に削平されている。最大長58㎝、最大幅48㎝、遺構検出面からの深さ６㎝を測る。壁面の立ち上がりは緩やかで、底面には凹凸が見られる。壁面などに酸化焔焼成はみられない。埋土は２層で、骨蔵器下に骨蔵器を安置するための炭片を少量含むしまりの弱い暗茶褐色砂質土を充填する。その後、この層に被さるように炭片を中量含む黒褐色砂質土を入れる。同層は骨片を含まない。

６は土師器の骨蔵器で底部のみが遺存する。外面は煤が付着し、内面は剥落している。甕を骨蔵器として転用したものであろう。



第９図　ST-2 平面図・土層断面図（S=1/20）



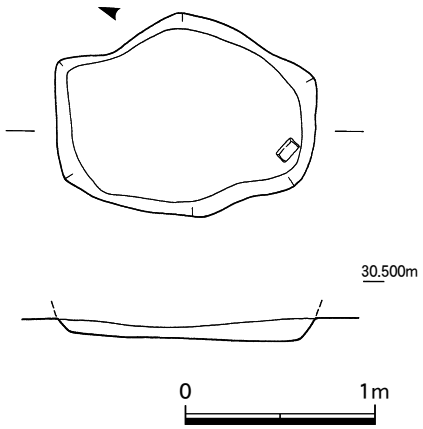
第10図　ST-2 出土遺物（S=1/3）

土坑

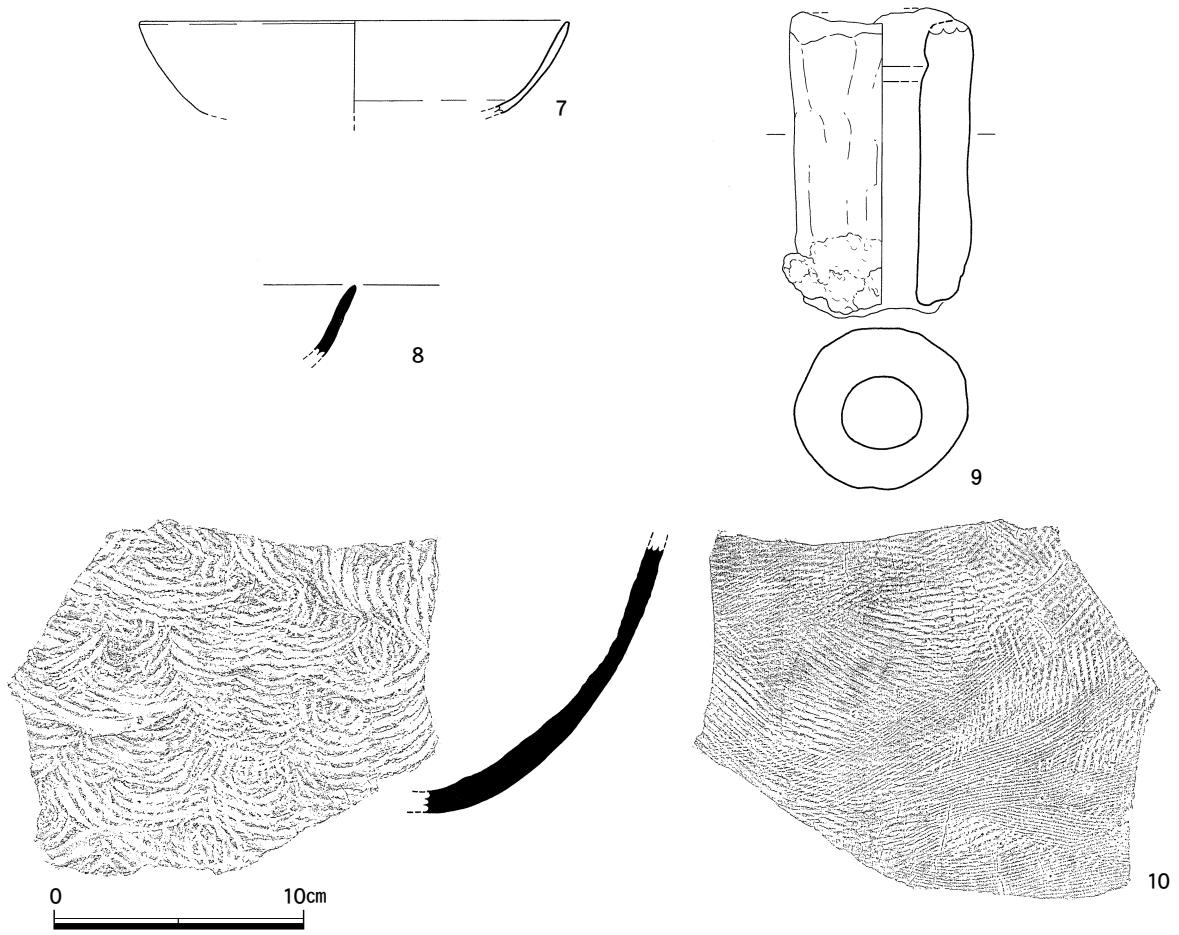
SK- 1 （第11・12図）

調査区南側に位置する。形状は楕円形で、最大長136㎝、最大幅108㎝、検出面からの深さ10㎝を測る。壁面の立ち上がりは緩やかで、底面は平坦である。埋土は単層で、遺物は須恵器、土師器、フイゴの羽口が出土した。埋置した状況にないため、一括して廃棄されたものと考える。

７は土師器の碗で復元口径17㎝を測る。口縁部は上外方にのびる。軟質で触れると指先に粉がつく。８は須恵器口縁部で、端部はやや外傾する。８世紀中頃～後半の資料。９はフイゴの羽口で、先端部から後端部にかけて黒色～茶褐色へと変色する。先端に鉄滓が銹着している。10は須恵器の底部に近い胴部片で、外面は叩き後ハケ目調整、内面は同心円当て具痕がのこる。



第11図　SK-1 平面図・断面図（S=1/40）

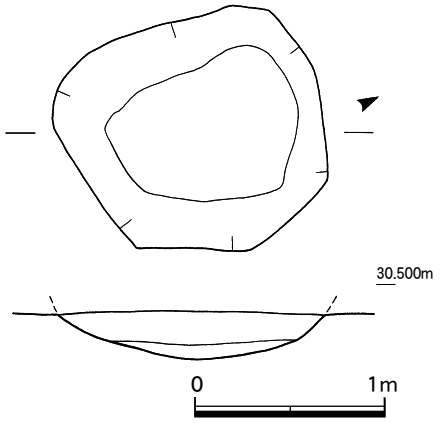


第12図　SK-1 出土遺物（S=1/3）

SK-2（第13・14図）

調査区南側に位置する。形状は楕円形で、最大長114㎝、最大幅96㎝、検出面からの深さ18㎝を測る。壁面の立ち上がりはなだらかで、底面はやや窪む。

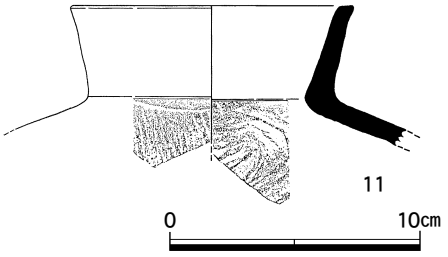
11は須恵器で甕の口縁部である。口縁部は平坦な水平面をもつ。胴部外面に叩き痕、内面に同心円当て具痕がのこる。8世紀前半～中葉の遺物か。



第13図　SK-2 平面図・断面図（S=1/40）

溝（第15図）

調査区北側に溝状遺構が集中する。各遺構の形状から水田に伴う溝状遺構の可能性を考えることができる。SD-2から中世土器片が出土したため、中世に機能した遺構群であろう。



第14図　SK-2 出土遺物（S=1/3）

SD-1

調査区北側に位置する。西側から湾曲するような形状で、残存長7.5m、最大幅150㎝、検出面からの遺構の深さ12㎝を測る。底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

SD-2

形状はほぼ直線的で、残存長148㎝、最大幅90㎝、検出面からの深さ８㎝を測る。底面はほぼ平坦である。

遺物は第16図12が出土した。瓦質土器鉢の口縁部で、16世紀代である。

SD-3

細長い形状で東側は調査区外となる。残存長2.7m、最大幅40㎝を測る。検出面からの深さ８㎝を測る。底面は東側がやや下がる。遺物は出土していない。

SD-4

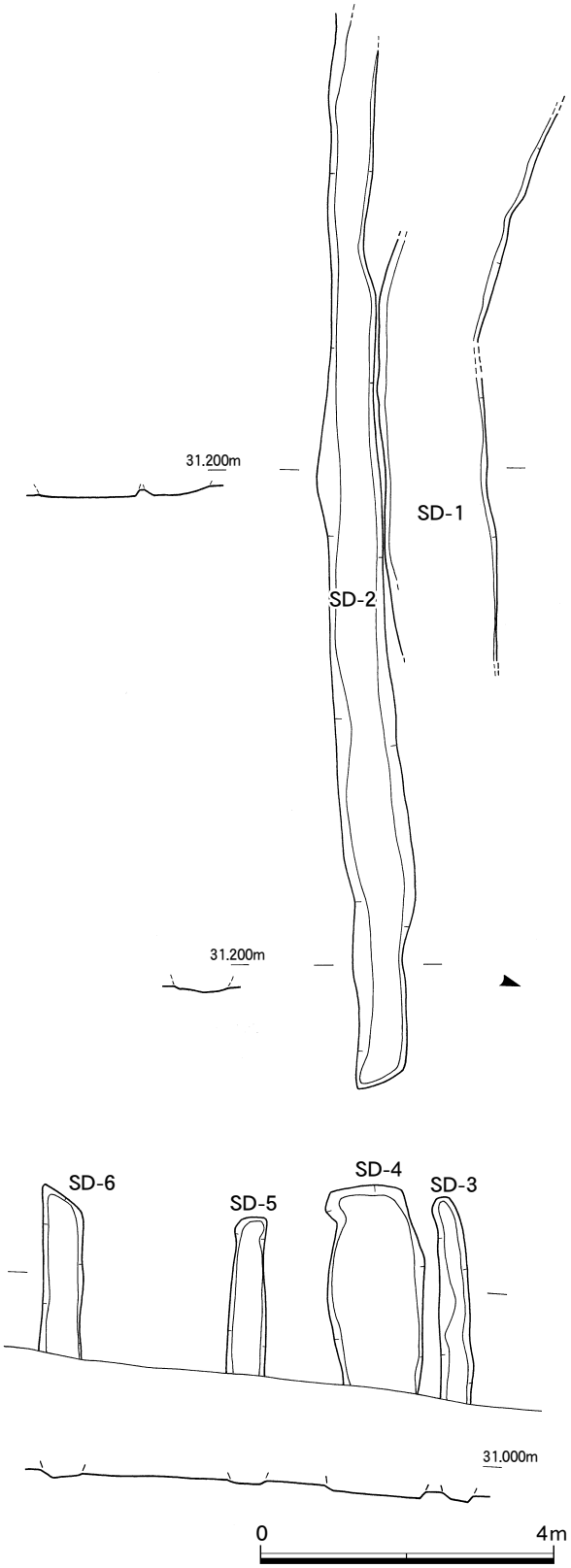
隅丸の楕円形状で東側は調査区外、西側延長線上にSD-2が所在する。最大長2.8m、最大幅130㎝、検出面からの深さ８㎝を測る。底面は東側がやや下がる。遺物は出土していない。

SD-5

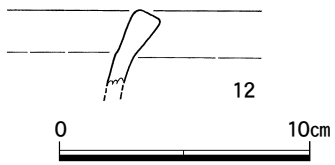
細長い形状で、最大長2.1m、最大幅50㎝、検出面からの深さ４㎝を測る。底面は東側がやや下がる。遺物は出土していない。

SD-6

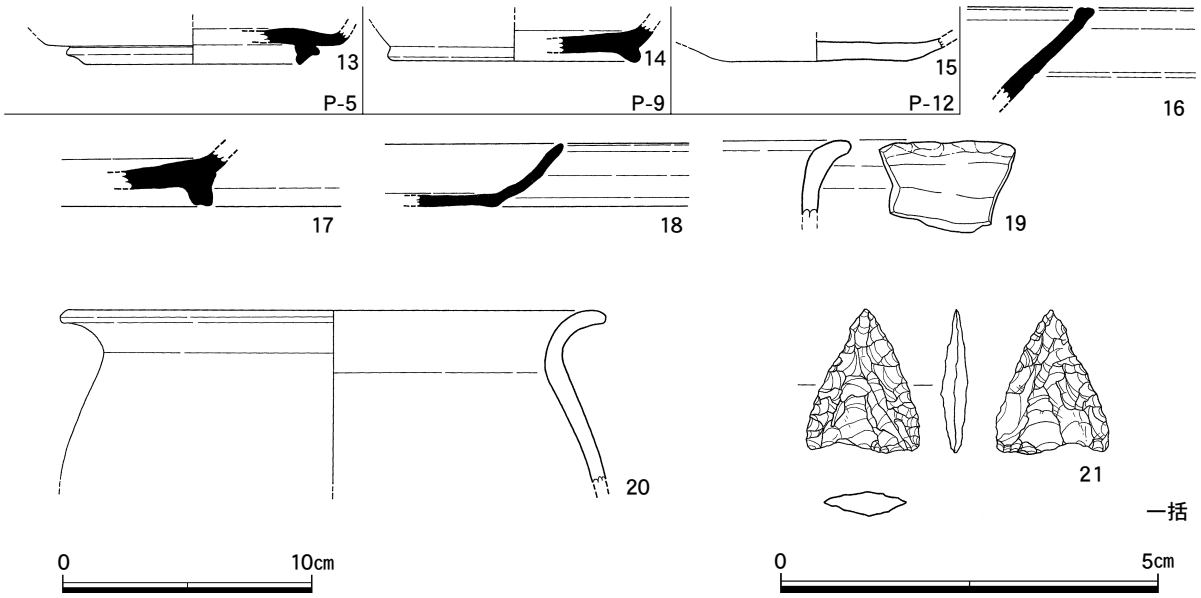
SD-5から南に約２m離れて位置する。最大長2.2m、最大幅60㎝、検出面からの深さ８㎝を測る。底面は東側がやや下がる。遺物は出土していない。



第15図　SD-1～6 平面図・断面図（S=1/100）



第16図　SD-2 出土遺物（S=1/3）



第17図　柱穴状遺構・調査区出土遺物（S=1/3・1/1）

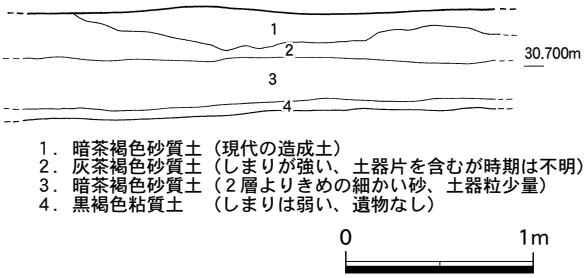
その他の遺構と遺物

第17図は柱穴状遺構ならびに遺構検出時に調査区内から出土した遺物である。**13**・**14**は須恵器の碗。**13**はP-5出土で、高台端部に段を有する。８世紀中葉の資料。**14**はP-9出土で、高台は底部と体部の境に付く。８世紀後葉。**15**はP-12出土の土師器杯。**16**～**21**は遺構検出時の遺物で、**16**は須恵器口縁部。端部は内側に屈曲し水平な平坦面をもつ。**17**・**18**は須恵器の碗で、**17**の高台は底部と体部の境に付く。８世紀後葉。**18**は体部と底部の境よりも内側に高台の剥離痕がのこる。８世紀中葉。**19**は口縁部が如意状に屈曲し端部は凹凸になる瓦質土器の鍋。中世後半代。**20**は口縁部が強く外反する土師器の甕。**21**は石鏃である。

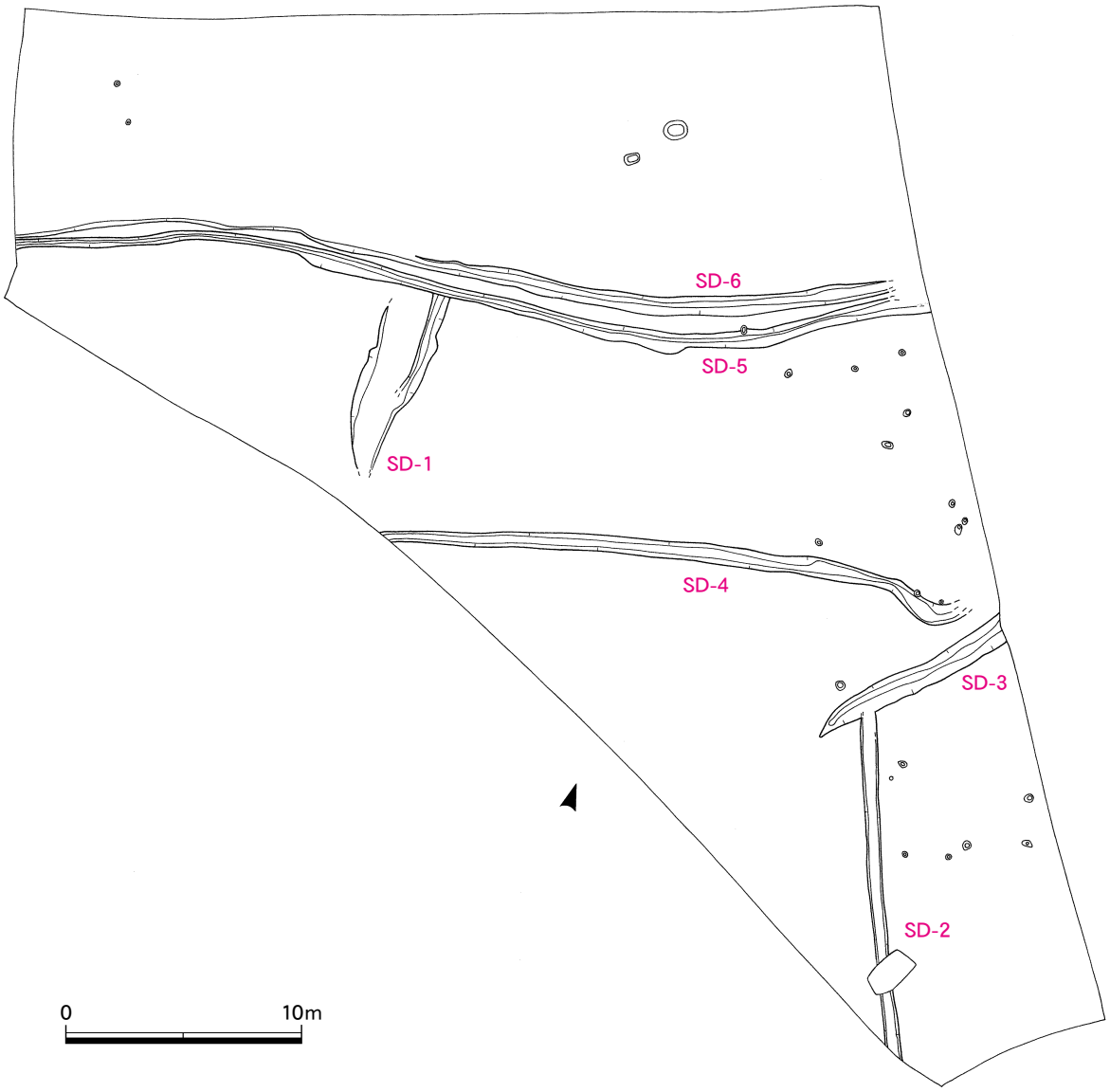
第３節　東区の調査

１）層序（第18図）

第18図は調査区北壁の土層である。現代の造成土（１層）と時期不明の灰茶褐色砂質土（２層）を剥ぐと３層に至る。この層までに西区基本層序のような近現代の水田に関係する土層は確認できない。３層下はクロボク状の黒褐色土（４層）が堆積し、それを除去すると茶褐色の地山に至る。３・４層は水平に堆積しており、ある時期造成が行われたことを示唆する。地山は調査区東側から西側にかけて下降し、東側と西側の比高差は約1.2ｍを測る。西側部分の湧水は激しく、調査区の３分の１は常に水没していた。西区と東区の間を流れる水脈に起因したものである。



第18図　東区基本層序（S=1/40）



第19図　東区遺構配置図（S=1/300）

２）遺構と遺物（第19図）

遺構は調査区全面から検出したがその密度は低い。検出した遺構は、溝状遺構６条、柱穴状遺構などである。柱穴状遺構はまばらであり掘立柱建物の復元には至っていない。各遺構は浅く、後世の造成により遺構上部は削平された可能性が高い。各遺構から古墳時代後期と中世の遺物が一定量出土した。遺構の機能した時期は中世であり、古墳時代の遺物は流れ込みと考えられる。調査面積約1,100㎡で、遺物の数量はパンケース１箱分であった。

溝

SD-1（第20・21図）

調査区中央やや西寄りに位置する。南北方向を指向し、南端は細く北端はSD-5に切られる。残存長7.6ｍ、最大幅2.4ｍ、検出面からの深さ15㎝を測る。床面は南から北にかけて下り、比高差60㎝を測る。底面東側は一段落ち込み、溝状を呈する。残存長４ｍ、最大幅70㎝、検出面からの深さ20㎝を測る。

22は端部を上下につまみ出す扁平な須恵器蓋の口縁部で、時期は８世紀後半。**23**は火鉢で、端部は方形に肥厚する。

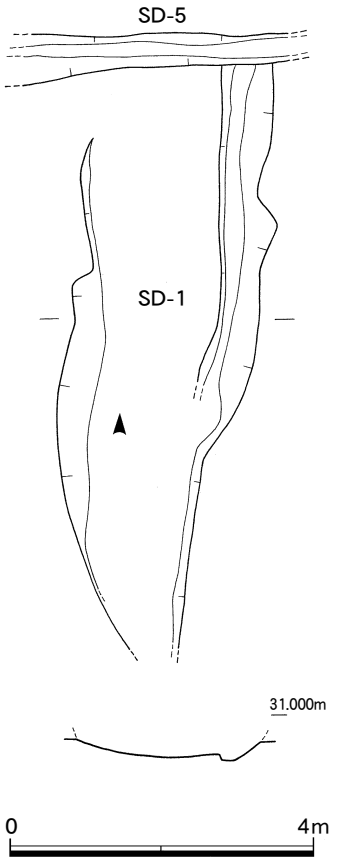
SD-2（第22図）

調査区南に位置する。細長い形状で一部現代の撹乱を受ける。北端はSD-3を切る。残存長14.8ｍ、最大幅70㎝、検出面からの深さ18㎝を測る。壁面の立ち上がりはやや急で、西側の立ち上がりは東側より低い。床面は南側が北側に比べ８㎝程高い。埋土は３層で、西側立ち上がりまで暗茶褐色砂質土で埋められる。その上は茶褐色砂質土と暗黒褐色砂質土で蓋をするように覆い、溝を埋め立て平坦面を作り出したものと考える。遺構の性格については、ほぼ真直ぐにのびる形状から何らかの区画溝である可能性を指摘しておく。SD-3とは直交しないため同時期に併存した遺構とは考えにくい。遺物は出土していない。

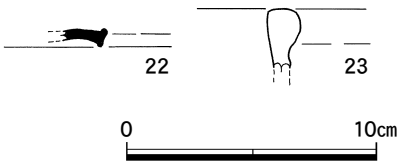
SD- 3（第22・23図）

調査区南に位置する。東端部は調査区外へのび、西端がすぼまる形状でSD-2に切られる。最大長8.8ｍ、最大幅１ｍ、検出面からの深さ32㎝を測る。断面は「Y」字を崩したような形状で、壁面の立ち上がりは南側は緩やかで、北側は急になる。底面西側と東側の比高差は66㎝で、西側の方が高い。形状から排水や用水に利用された溝の可能性が高い。埋土は２層で底面から10㎝程度は遺物を含まない茶褐色砂質土、上層は土器・瓦片を含む暗黒褐色砂質土となる。堆積状況から人為的な埋め戻しを指摘できる。

24～**28**は上層出土の遺物である。**24**は須恵器の碗で、７世紀後半の資料。**25**・**26**は瓦質土器で、**25**は皿の底部付近の破片。



第20図　SD-1 平面図・断面図（S=1/100）

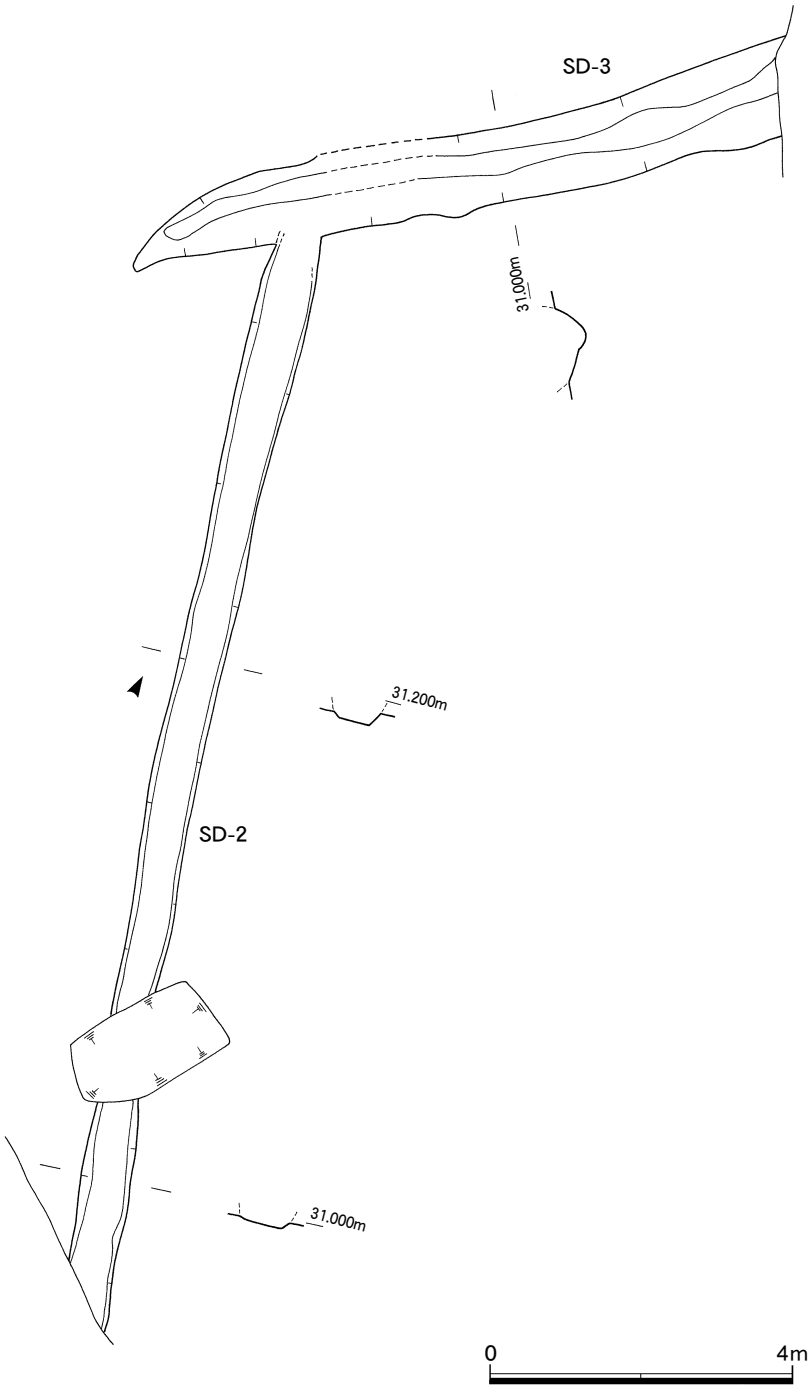


第21図　SD-1 出土遺物（S=1/3）

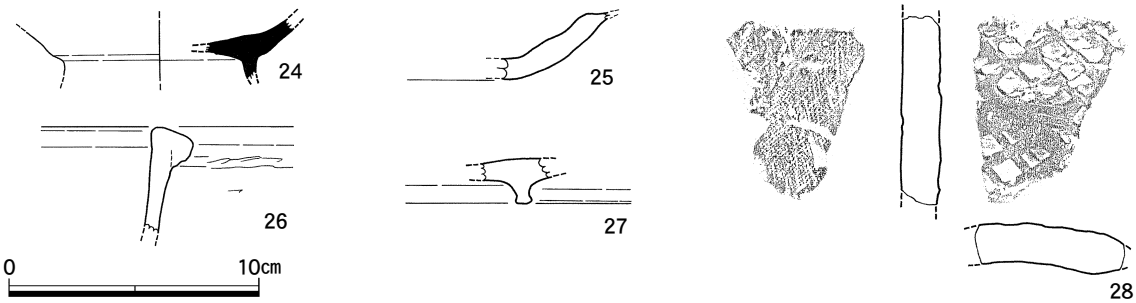
色調は黒褐色を呈し、端部は水平な平坦面をつくる。残存器高2.7㎝を測る。**26**は鉢で、粘土を貼り付け端部を方形に肥厚させる。体部には工具を用いて貼り付けを行う。**27**は土師器の碗で、内外面を丁寧にナデる。８世紀前半～中葉か。**28**は平瓦の破片である。内面に布目と枠板連結紐状の紐痕がのこる。外面は斜格子叩きを施す。相原廃寺のA-４類、ホヤ池Ⅰ類-ｄに属する。一部に斜格子叩きを切るように縄目叩き状の痕跡が認められるが、破片資料であり明確にできなかった。

SD-４（第24図）

調査区中央に位置する。東西方向を指向し、東側は湾曲している。最大長24.5ｍ、最大幅80㎝、検出面からの深さ10㎝を測る。壁面の立ち上がりはやや急で、底面は西側の方が高く東側との比高差は46㎝である。形状から排水や



第22図　SD-2・3 平面図・断面図（S=1/100）



第23図　SD-3 出土遺物（S=1/3）

用水に利用された溝の可能性が高く、流水方向は西から東となる。埋土は単層で遺物を少量含んでいた。

29は平瓦の側端部を含む破片で、内面に布目痕があり、外面はナデを行う。側面はヘラ削りで破面は不明である。全体に水磨の痕跡が認められる。

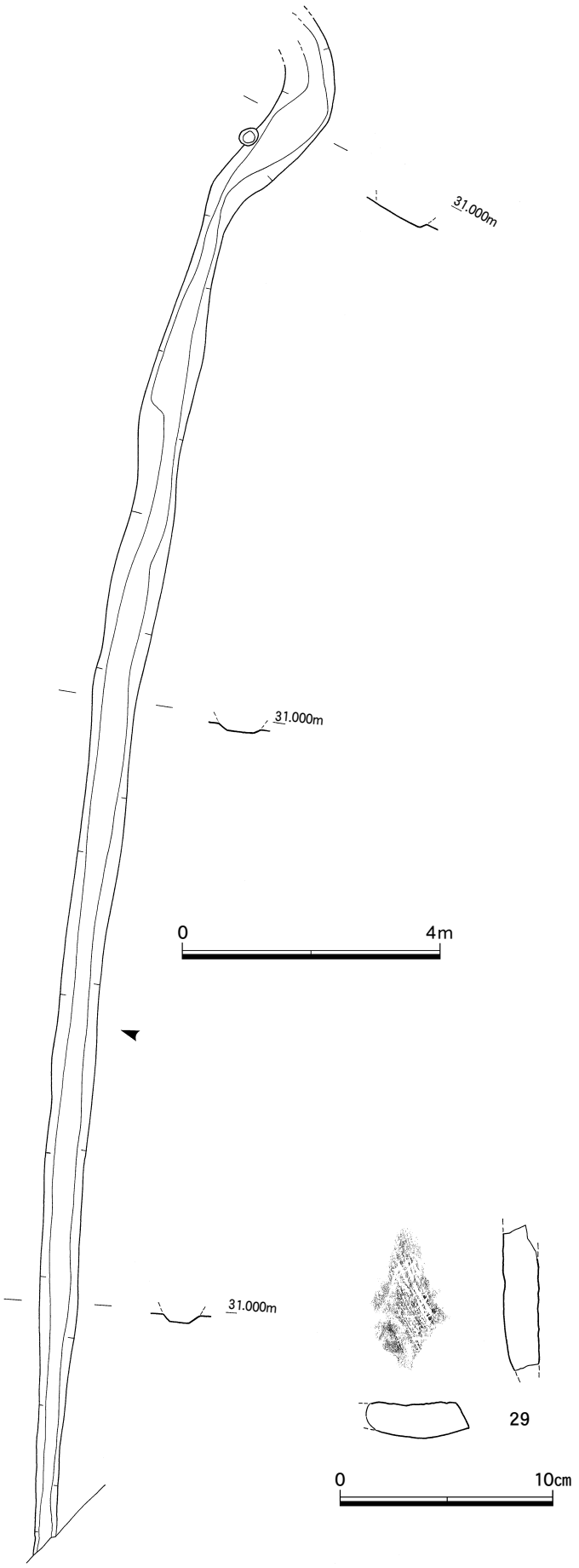
SD-5（第25図）

調査区中央やや北よりに位置する。調査区を東西に横切る遺構で、ゆるく弧を描きながら中央付近でSD-1を切る。また後述するSD-6と並んで走る。最大長38.8m、最大幅92㎝、検出面からの深さ50㎝を測る。壁面の立ち上がりは南側が緩やかで高く、北側が急で低い。底面西側と東側の比高差は59㎝で、西側の方が高い。排水や用水に利用された溝であろう。埋土は単層で遺物を少量含んでいた。

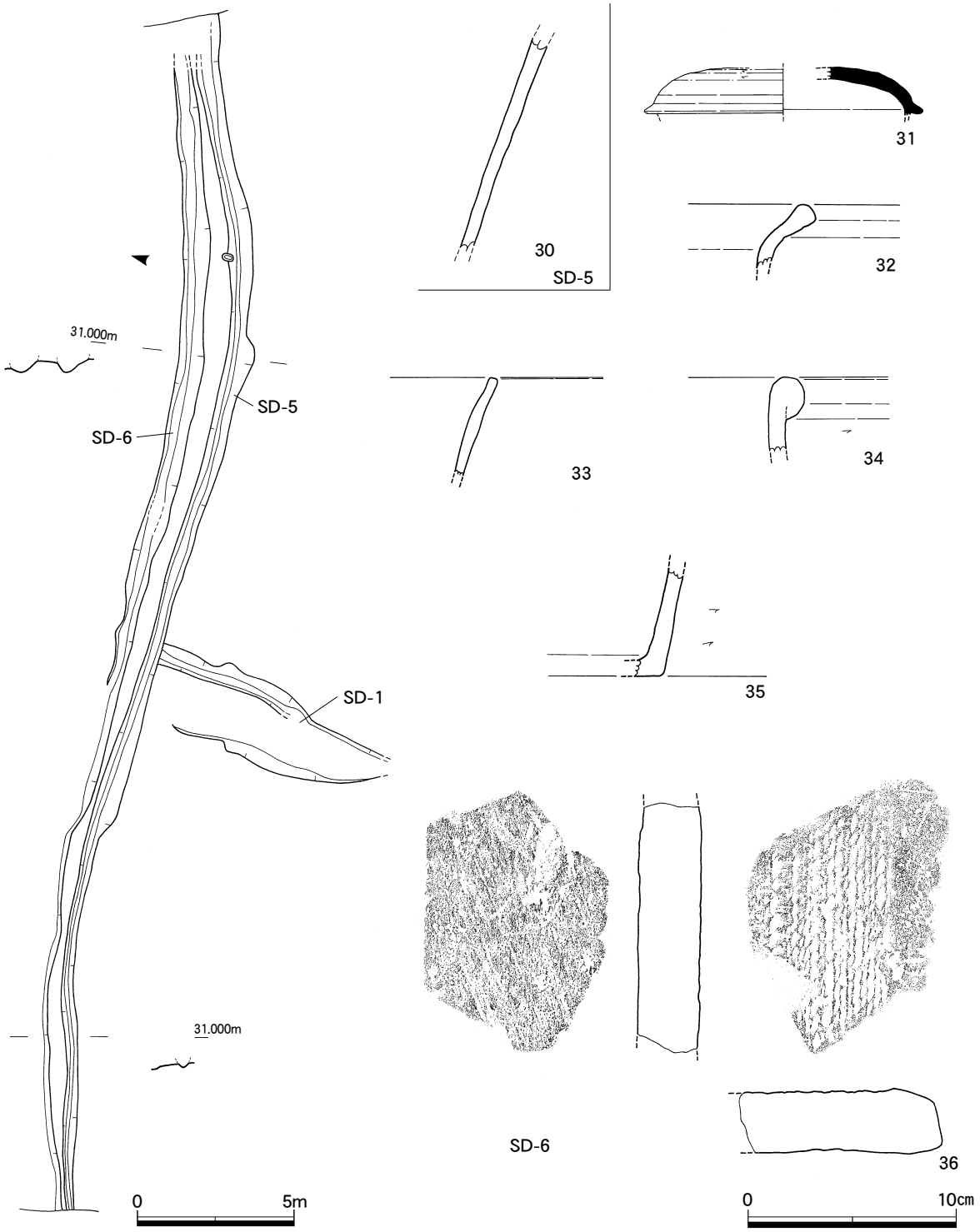
30は瓦質土器の胴部片で、外面に縦方向ハケ目がのこる。

SD- 6（第25図）

調査区中央やや北よりに位置する。SD-5の北側を東西方向に走る遺構で、最大長20m、最大幅86㎝、検出面からの深さ42㎝を測る。底面西側と東側の比高差は44㎝で、西側の方が高い。排水



第24図　SD-4 平面図・断面図・出土遺物（S=1/100、1/3）



第25図　SD-5・6 平面図・断面図・出土遺物（S=1/200、1/3）

や用水に利用された溝であろう。

31は須恵器蓋で、７世紀後半の遺物である。32～35は瓦質土器で、32・33は鍋の口縁部。34は鉢、35は火鉢の底部である。36は側端部を含む平瓦で、内面は布目痕を消すように工具ナデで仕上げ、外面は縄目叩きを部分的に用いる。相原廃寺のB-ａ-１類に属す。側面はヘラケズリを施す。

遺物観察表１　土器・瓦　　単位：cm

遺物No.	挿図No.	種別・器種	法量 口径・底径	法量 器高	器形・成形	調整・紋様	焼成	胎土	色調	備考	図版No.
1	8	須恵器・蓋	17.8	2.1	端部は方形で垂下する。つまみを貼り付ける。	回転ナデ	良好	微細な石英、角閃石粒多量	明灰色		5
2	8	須恵器・壺	10.0　12.0	14.6	口縁端部は垂直に立ち上がり、肩はやや張る。	外面胴部上半ナデ、下半ヘラケズリ、内面胴部ヨコナデ、底部ナデ	良好	微細な石英・角閃石粒多量	外面黒灰色～灰色 内面灰色		5
3	8	土師器・碗	13.2　9.2	3.6	底部は肥厚する、端部は尖り気味	底部回転ヘラ切り、他はナデ	良好	微細な石英・角閃石・暗赤色粒多量	淡橙色		5
4	8	土師器・碗	13.5　9.6	3.6	端部はやや外傾する。	外面回転ヘラケズリ、底部ヘラ切り後雑なナデ 内面ヨコナデ	良好	微細な石英・角閃石粒微量	淡橙色		5
6	10	土師器・底部			底部は丸みを帯びる	ナデ	良好	微細な長石・角閃石多量、白色粒中量	暗褐色	外面煤付着	6
7	12	土師器・碗	(17.0)		口縁部は上外方にのびる	ヨコナデ	やや不良	微細な角閃石少量	淡黄色		
8	12	須恵器・碗			口縁部外面に凹凸あり	ヨコナデ	良好	微細な白色粒多量	灰色		
9	12	土師器・羽口	7.3(最大径) 3.2×2.8(内径)		先端部はやや細くなり、鉄滓が銹着する	ナデ	良好	微細な長石・角閃石多量、白色粒中量	黄褐色		6
10	12	須恵器・胴部			丸みを帯びながら底部へ至る	外面タタキ後ハケ目、内面同心円当て具痕	良好	微細な長石微量	灰色		6
11	14	須恵器・甕	(11.0)		口縁部は上外方にのびる	口縁部ヨコナデ、外面胴部タタキ、内面同心円当て具痕	良好	微細な白色粒中量	灰色		6
12	16	瓦質土器・鉢			端部方形	ヨコナデ	良好	微細な長石・角閃石・石英粒多量	灰黄褐色		6
13	17	須恵器・碗		(8.4)	高台「く」の字型	ヨコナデ	良好	微細な白色粒多量	灰白色		6
14	17	須恵器・碗		(9.6)	高台は底部外縁よりに付く	摩滅のため不明瞭	不良	微細な白色粒少量	黄灰色		6
15	17	土師器・杯		7.3	底部平底	摩滅のため不明瞭	良好	微細な角閃石・白色粒少量	橙色		6
16	17	須恵器・口縁部			端部方形	ヨコナデ	良好	微細な白色粒多量	灰色		6
17	17	須恵器・碗			高台は底部外縁よりに付く	ヨコナデ	良好	微細な白色粒中量	灰色		6
18	17	須恵器・碗			口縁部はゆるやかに内傾する	ヨコナデ、底部ナデ	良好	微細な白色粒多量	灰色		6
19	17	瓦質土器・鍋			端部は強く屈曲し外反する	ナデ	良好	微細な角閃石多量、石英中量	淡茶色		6
20	17	土師器・甕	(20.8)		端部は如意状に屈曲する	ナデ(剥落のため不明瞭)	良好	微細な黒曜石、角閃石、長石多量	橙色		6
22	21	須恵器・蓋			端部上方に跳ね、下方に垂下する	ヨコナデ	良好	微細な白色粒多量	灰褐色		
23	21	瓦質土器・火鉢			端部方形	ナデ	良好	微細な角閃石、長石多量	淡黄色		
24	23	須恵器・碗			高台は底部外縁よりに付く	ヨコナデ	良好	微細な白色粒少量	外面暗灰色 内面赤灰色		7
25	23	瓦質土器・皿			端部は強く外方に屈曲する	ナデ	良好	微細な長石、石英多量	黒褐色		7
26	23	瓦質土器・鉢			端部方形	外面胴部ヘラケズリ、口縁部工具痕、他はナデ	良好	微細な白色粒少量	黄灰色		7
27	23	土師器・碗			高台は底部内側に付く	ナデ(ミガキ？)	良好	微細な長石・角閃石多量、白色粒多量	橙色		7
28	23	瓦・平瓦		厚さ(1.6)		外面格子目タタキ 内面布目痕	良好	微細な赤白粒、白色粒中量	淡茶色		7
29	24	瓦・平瓦		厚さ(1.6)		外面ナデ(水磨により不明瞭)、内面布目痕、側端部ヘラケズリ	良好	微細な赤色粒中量、石英、角閃石微量	淡茶色	破面不明	7
30	25	瓦質土器・胴部				外面タテ方向ハケ目 内面ナデ	良好	微細な角閃石中量	淡灰色		7
31	25	須恵器・蓋	口径(11.8)		口縁部は丸みをもって降下する	外面体部回転ヘラケズリ、他はヨコナデ	良好	微細な石英粒少量	灰色		7
32	25	瓦質土器・鍋			端部方形で屈曲する	ヨコナデ	良好	微細な長石、白色粒中量	灰色		7
33	25	瓦質土器・鍋			口縁部はやや外方にのびる	ナデ、先端部ヨコナデ	良好	微細な長石多量	黒褐色		7
34	25	瓦質土器・鉢			端部方形	外面胴部ヘラケズリ、他はヨコナデ	良好	微細な長石・角閃石少量、白色粒多量	灰色		7
35	25	瓦質土器・火鉢			底部平底	外面胴部ヘラケズリ、他はナデ	良好	微細な白色粒・長石多量	淡黄橙色		7
36	25	瓦・平瓦		厚さ(3.1)		外面縄目痕、内面工具ナデ	良好	微細な白色粒・角閃石中量	黒褐色		7

遺物観察表２　鉄製品　　単位：cm

遺物No.	挿図No.	器種	法量 長さ・直径	法量 幅	法量 厚さ	備考	図版No.
5	8	刀子	13.8 6.0(刃部) 7.8(茎部)		0.3(刃部)茎部(0.3)	刃端部欠損、刃部と茎部の境に段あり	5

遺物観察表３　石製品　　単位：cm

遺物No.	挿図No.	器種	石質	法量 長さ・直径	法量 幅	法量 厚さ	法量 重量(g)	図版No.
21	17	石鏃	黒曜石	1.9	1.5	0.35	0.81	6

第４章　坂手隈城跡　火葬墓出土人骨について

舟橋京子＊・田中良之＊＊
＊九州大学総合研究博物館
＊＊九州大学大学院比較社会文化研究院

１．はじめに

大分県中津市坂手隈城跡から人骨が出土し、九州大学大学院比較社会文化学府基層構造講座へ搬送され、本講座において、整理・分析をおこなった。以下にその結果を報告する。なお、人骨は現在九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座に保管されている。

２．人骨出土状態

【ST-1】

人骨は楕円形の墓壙内に埋設された骨蔵器（壺）から若干の炭片とともに出土している。口縁部から５㎝、５㎝－10㎝、10㎝－底部までのいずれの位置においても頭蓋骨片・上肢骨・下肢骨がまんべんなく出土しており、骨蔵器内のレベルによる部位の偏りは見られない。

【ST-2】

人骨は楕円形の墓壙内に埋設された骨蔵器内から炭片とともに出土している。

３．人骨所見

ST-1号人骨

【保存状態】

本人骨は火葬骨である。本人骨の保存状態はあまり良くない。頭蓋骨は左右頬骨の眼窩付近片・左右上顎骨の歯槽部付近・左右側頭骨の外耳から乳様突起付近・高等骨の外後頭隆起付近・右下顎頭・左下顎枝・オトガイ付近が遺存している。その他にも部位特定困難な頭蓋骨片が複数遺存しており、確認可能な頭蓋縫合は全て内外板ともに開いている。外後頭隆起は発達していない。歯牙は１本のみ遺存する。確認できる歯式は以下の通りである。

○	△	○	○	○	○	／	／	／	／	／	○	○	×	／	／
／	／	／	／	／	／	○	○	○	○	○	○	○	／	／	／

○歯槽開放　×歯槽閉鎖　／欠損　△歯根のみ　●遊離歯　( )未萌出　c 齲歯

躯幹骨は、環椎・軸椎片が遺存しており他にも頸椎もしくは胸椎の椎体片が複数遺存している。いずれの椎体片にもリッピングは認められない。この他にも肋骨片が複数遺存している。

上肢骨は、右鎖骨の外側２分の１、左右鎖骨片、左上腕骨遠位側３分の２、左右尺骨体部片・左

肘頭、左月状骨が遺存している。この他にも基節骨片３点と中手骨２点が遺存している。

下肢骨は、右寛骨の大坐骨切痕角付近、大腿骨の左右骨頭、左右不明大腿骨体部片、左右不明脛骨体部片、左右不明腓骨体部片、右距骨・踵骨片、基節骨１点が遺存している。

大坐骨切痕角は広い。耳状面は表面が平滑で粗像は認められない。

【年齢・性別】

年齢は、頭蓋主縫合の癒合状況および寛骨耳状面の状態と椎体にリッピングが見られないことから成年と推定される。性別は外後頭隆起が発達していないことから女性と判定される。

ST-2号人骨

【保存状態】

本人骨は火葬骨である。本人骨の保存状態はあまり良くなく頭蓋片・長管骨などが遺存しているものの細片化しており、細かい部位同定や観察が困難である。

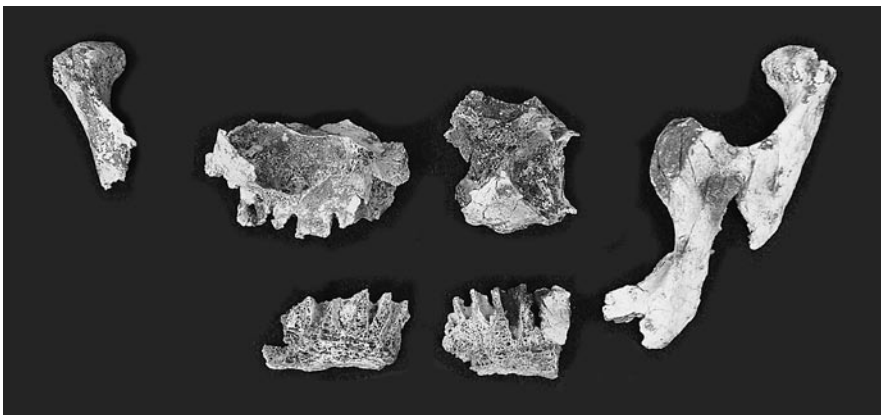
【年齢・性別】

年齢・性別ともには、推定可能な部位が遺存していないため不明である。

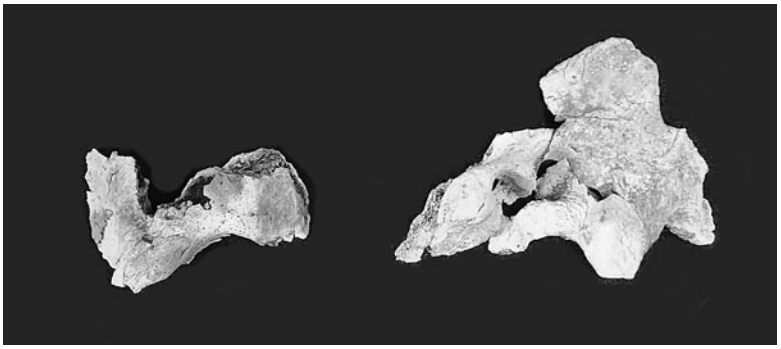
４．まとめ

以上出土人骨についての記載･報告を行ってきた。本遺跡出土人骨は保存状態があまり良くなく、火葬による変形も著しいため、計測に耐えうる骨はなく形質的比較を行える個体は得られなかった。

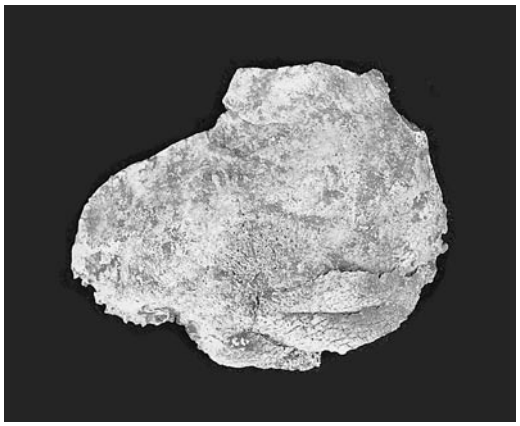
最後に本報告にあたり、中津市教育委員会の浦井直幸氏・大分県教育委員会の村上久和氏にはご便宜を賜った。記して感謝したい。



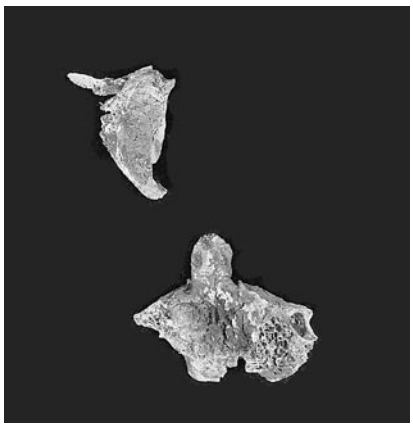
ST-1 骨蔵器出土火葬骨（顎骨）



ST-1 骨蔵器出土火葬骨（側頭骨）

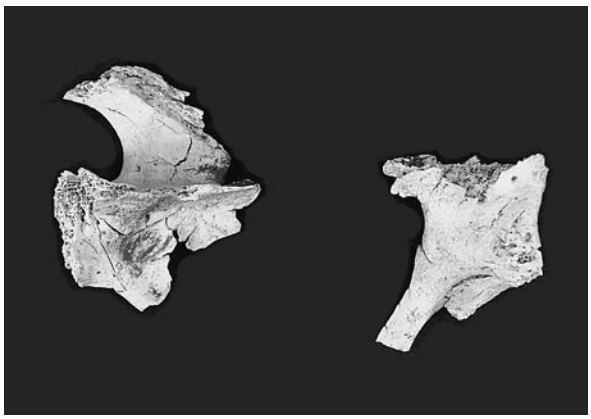


ST-1 骨蔵器出土火葬骨（後頭骨）



ST-1 骨蔵器出土火葬骨（環椎・軸椎）

ST-1 骨蔵器出土火葬骨（上肢骨）



ST-1 骨蔵器出土火葬骨（肩甲骨）

ST-1 骨蔵器出土火葬骨（右寛骨）

ST-1 骨蔵器出土火葬骨（下肢骨）

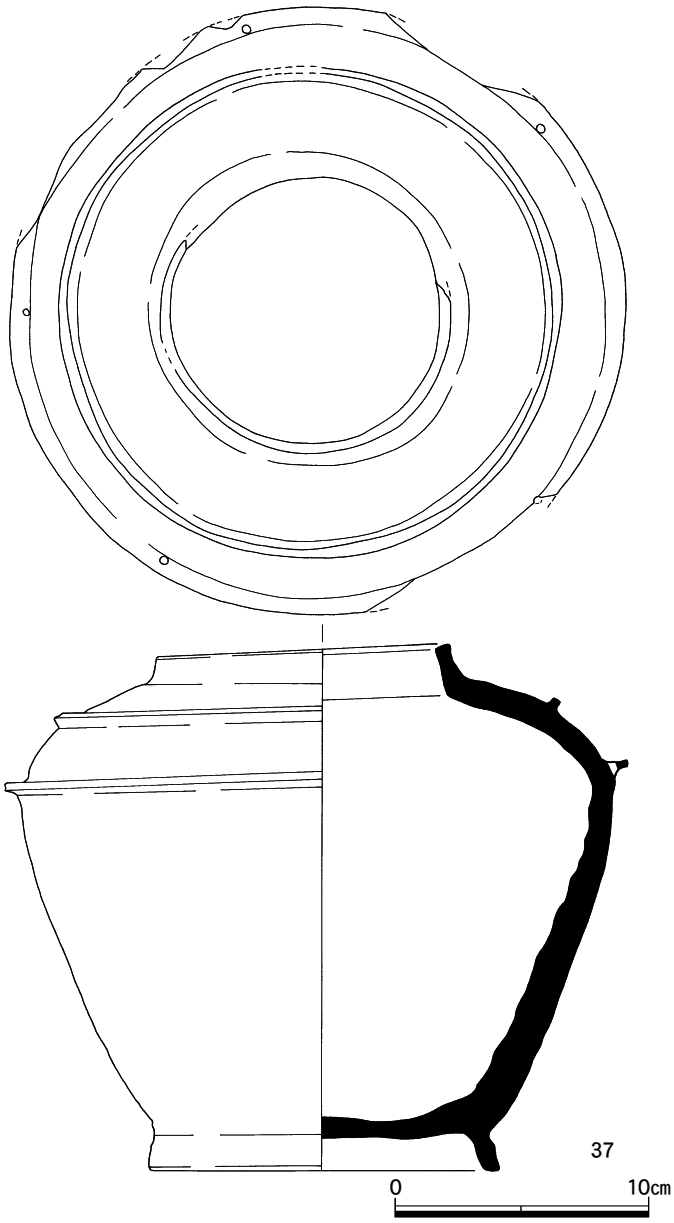
ST-1 骨蔵器出土火葬骨
（距骨・踵骨）

第５章　総　括

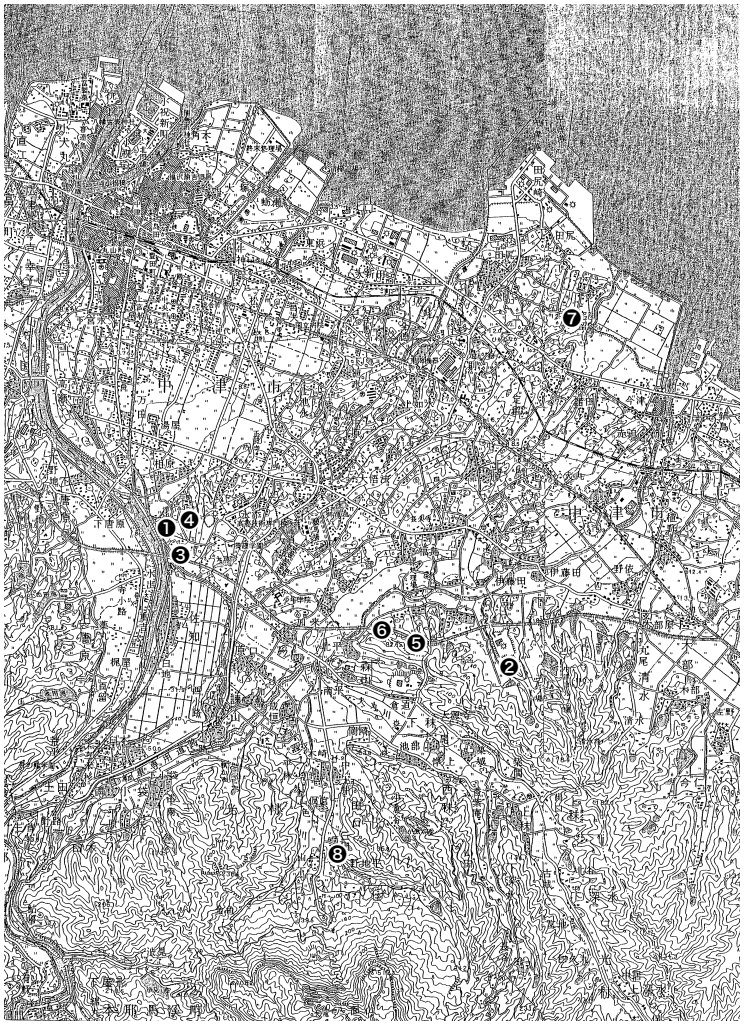
坂手隈城跡の調査は西区と東区に分けて行った。西区では古代の火葬墓２基を発見したことが大きな成果である。このうち、墳丘をもつ８世紀中頃～後半のST-1は、土師器皿２点・刀子１点を副葬品として有しており注目される。また火葬墓を２基確認したことも重要で、群集形態をとる火葬墓は９世紀代までに造墓を終える傾向があるという既往の研究成果[(1)]を追認するものとなった。次に当該被葬者について、人骨の分析によって成人女性であることが判明した。発掘段階では刀子の発見から、被葬者は官人クラスの男性であろうと推測していたが再考を迫るものとなった。一方、周辺の遺跡に目をやると西区から東に320ｍ離れた台地上に相原山首遺跡が、南に480ｍ離れた地点に勘助野地遺跡が所在する。両遺跡とも同時代の火葬墓群が展開するが、ST- １のように副葬品を伴う遺構は確認されていない。群集形態をとる火葬墓群に質的な差異が存在することは確かであり、それがどのような理由に起因するのかST- １被葬者の性格も含めてこれからの課題である。

また、特徴的な遺物として東区で確認された平瓦片がある。東区は中世の水田経営に関わる遺跡と理解することができるため、古代瓦の出土は異質な感をうける。古代瓦が出土する相原廃寺は北に約750ｍ離れている。調査区周辺に瓦葺建物跡が存在するのか、あるいは溝状遺構の廃棄に伴う祭祀行為なのか、今回の調査では明らかにできなかった。

第26図**37**は中津市大字伊藤田の大谷窯跡周辺から出土したと伝わる須恵器骨蔵器である。昭和63年、市内在住の小屋敷幸男氏から中津市歴史民俗資料館へ寄託された資料で、同氏死去後も同館が保管していたものを、平成22年、ご家族から寄贈をうけた。今回の報告に合せて紹介する。須恵器短頸壺の優品で、肩部と胴部に鍔状の突帯を貼り付ける。このうち胴部の突帯に径４㎜の穿孔を５つ穿つ。穿孔間隔は10.7 ～ 14.7㎝で規則性はない。突帯を貼り付けた後に上から穿っており、突帯下の胴部にその際の傷がのこる。頸部は内傾し、高台は体部と底部の境につく。口径11.5㎝、底径13.6㎝、器高20.7㎝を測る。調整は胴部中位の鍔状突帯から体部と底部の境までを回転ヘラケズリとし、その他はヨコナデとする。



第26図　伊藤田大谷窯跡周辺出土骨蔵器（S=1/3）



1	坂手隈城跡（8世紀中頃～後半）	6	森山遺跡（8世紀前半～10世紀）
2	大谷窯周辺火葬墓（8世紀後半、第26図37）	7	定留遺跡（9世紀代）
3	勘助野地遺跡（8世紀前半～後半）	8	伝大日廃寺火葬墓
4	相原山首遺跡（8世紀後半～9世紀前半）	9	上万田遺跡
5	寺迫遺跡（9～10世紀代）	10	相原火葬墓

第27図　中津市内出土骨蔵器分布図（S=1/90,000）

色調は灰色で、焼成は良好である。8世紀後半の資料と思われる。穿孔は、蓋と骨蔵器を固定するための紐を通す穴である可能性がある[(2)]。

第27図は中津市内の骨蔵器出土として報告された遺跡の分布図である。出土地点があいまいなものは図示していない（9、10）。これを見ると2群の存在が認められる。今回調査区周辺と八面山から八ツ手状にのびる丘陵地域である。この2群を比較・検討する力量はないが、当該期の中津地方に2つの墓域として認識された空間が存在したことがわかる。今後、これら墓域の研究や被葬者を輩出した集落の発見を期待したい。

註

(1)　原田昭一「二豊地域における奈良・平安期の墳墓」『森山遺跡』大分県教育委員会　1995
(2)　村上久和氏（大分県埋蔵文化財センター）ご教示。

写　真　図　版

遺跡遠景（南から）

西区全景（北から）

写真図版 2

西区

ST-1 検出状況（東から）

ST-1 遺物検出状況（南から）

ST-1 遺物検出状況（西から）

ST-1 遺物検出状況（南から）

ST-1 遺物検出状況（南から）

ST-1 完掘状況（南から）

ST-2 検出状況（西から）

ST-2 遺物検出状況（東から）

ST-2 土層堆積状況（東から）

SK-1 遺物検出状況（東から）

SK-1 遺物検出状況（東から）

SK-2 完掘状況（西から）

写真図版 4

東区

東区全景（東から）

SD-2（東から）

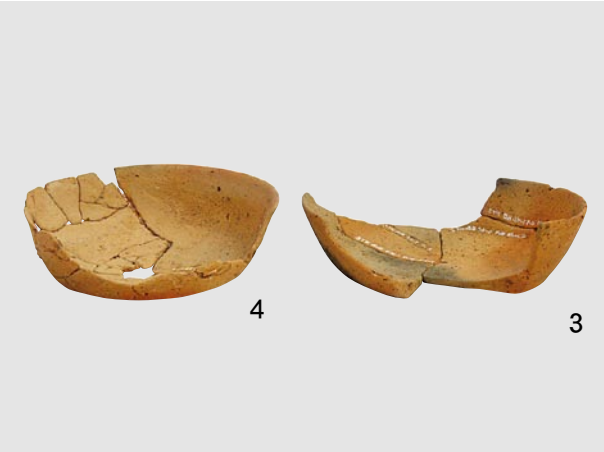
SD-5・6（南から）

1

1

2

1・2


4
3

5

写真図版６　出土遺物

6

9-a

9-b

10

11

12

13

13

14

15

16

17

18

18

20

21

24

26

27

28-a

28-b

31

32

33

34

35

36-a

36-b

37-a

37-b

報 告 書 名 抄 録

ふりがな	さかてくまじょうあと
書名	坂手隈城跡
副書名	三口浄水場排水処理施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	中津市文化財調査報告
シリーズ番号	第52集
編集者名	浦井　直幸
編集機関	中津市教育委員会
所在地	〒871-8501　大分県中津市豊田町14番地3　TEL 0979-22-1111
発行年月日	2011年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
坂手隈城跡（さかてくまじょうあと）	大分県中津市（おおいたけんなかつし） 大字相原（おおあざあいはら） 3189番地1他	44203	203060	33° 33′ 40″	131° 11′ 32″	20060410 ～ 20060804	2100㎡	排水処理施設建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
坂手隈城跡	集落・墓	古代・中世	火葬墓・土坑・溝状遺構	須恵器・土師器・鉄器・瓦質土器・瓦	副葬品をもつ古代の火葬墓

要約	西区において、古代の火葬墓を２基確認した。このうち１基は、墳丘をもつ8世紀中頃～後半の遺構で副葬品を伴っていた。付近の古代火葬墓に副葬品を伴う例は見られず、貴重な発見となった。東区では中世の水田に伴うと考えられる溝状遺構を確認した。埋土から相原廃寺に使用されたものと同じ型の平瓦が出土している。付近に存在した瓦葺建物のものか、遺構廃棄に伴う祭祀行為に使用した遺物であるのか明らかにできなかった。

坂手隈城跡

三口浄水場排水処理施設建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

中津市文化財調査報告 第52集

2011年３月31日

発行　中津市教育委員会
印刷　㈱川原田印刷社